

余華・著
泉京鹿・訳
「兄弟」

中国の人気作家が10年ぶりに書き下ろした大作。中国現代史を人々は、どう生き抜いてきたか。ある義兄弟を通して赤裸々に描く。

前篇の舞台となるのは60〜70年代。女手一つで育てられた李光頭は、7歳にして町で有名な悪ガキだった。そんなある日、母親の李蘭が、頼りがいのある中学教師・宋凡平と再婚することになった。

李光頭は、宋凡平の息子で1歳上の宋鋼と、真の兄弟のように絆を深めていくが、一家の平穏は長く続かない。時は文化大革命の真っ只中。反革命分子とされた父親は撲殺され、数年後、母も病死する。

後篇は改革開放路線が進む80年代以降の中国。街一



番の美女と結婚した宋鋼は、真面目ではあったものの時流についていけず貧窮。片や李光頭は、公務員の地位を捨てて廃品回収業から身を立て、「スーパーリッチ」と呼ばれる富裕層に成り上がる。

大変貌を遂げる時代のうねりに、2人の人生は翻弄される。悲劇と喜劇の要素をともしに取り込んだ、息の長い物語。圧倒的なスケールの大きさは、いかにも中国流といった趣。〔文藝春秋・上下巻各2000円〕

北村薫の
「北村薫の
創作表現講義」

北村薫氏は『スキップ』などの作品で多くの愛読者を持つ人気ミステリ作家だが、博覧強記の読書人としても知られている。その北村氏が05、06年の2年間、母校・早稲田大学で客員教授として「創作指導」表現演習」を担当。本書はその講義をまとめた講義録である。

多彩多様なテキスト（塚

本邦雄の掌編小説、歌舞伎の「夏祭浪花鑑」、寺山修司の短歌など）を取り上げ、その表現の面白さと独自性を、感動とともに軽やかな語り口で伝えるのはさすが。日々さまざまな表現と出会い、「スパークする」作家の創作魂が面白い。「書く」「読む」ことの奥義を、「分かる」こと「伝える」ことの妙味とともに教えてくれる。

人生とは個性の創作であるとする氏。「生きていく毎日もまた表現」という言葉に、「読むこと書くこと」は人間理解の方法であり、「読書」はコミュニケーションでもあると気づかされる。編集者の話等も収録し、学生だけでなく、大人にも発見の多い1冊。〔新潮選書・1365円〕

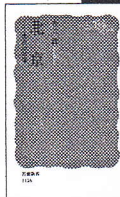
手嶋龍一
「葡萄酒が、
さもなれば銃弾を」

本書に登場する29人は、筆者がNHK特派員時代、取材対象として接した人物が中心である。米国ではオバマ、ヒラリー両民主党大

北京——都市の記憶

春名徹

岩波新書 8100円



五輪開催を控えた巨大都市の案内記。天安門広場に故宮、郊外にある万里の長城や盧溝橋まで。主要な名所を次々に紹介するが、観光ガイド的記述にはとまらない。約3000年前の燕国から歴史を説き起こし、街の中心は元の皇帝・フビライが矢を射て決めたとの

伝説も披露。繁華街・王府井の項では、有名料理店の評判から夜の露店情報まで伝える。ノンフィクション作家の著者は、78年の初訪問で魅せられて以来の北京リピーター。自身の五感を使得得た知見が盛り込まれている。一読しておけば、五輪観戦の楽しみも深まる。

統領候補や、ケネディ、レーガン両元大統領、キッシンジャー元国務長官、欧州ならコール独元首相といった現代の国際政治を動かしてきたキーパーソンら。

ここでは、筆者のファイルターを通した人物像が描かれる。「アッシュの戦争」を厳しく批判するオバマの政治家としての原点はシカゴの黒人貧民街であり、その彼が大統領となった時、アメリカの政治はどう変わるのか、と論を進めるように。

読者にとって馴染みが深いのは、麻生太郎、小泉純

一郎、小沢一郎、安倍晋三、福田康夫といった政治家たちか。「メデア」と対話ができない」としながらも、麻生太郎を「スピーチライターを存分に使いこなしている初めての外相」と評し、福田首相の章では、「日米同盟が空洞化の兆しを見せている」と警鐘を鳴らす。

人物評伝でありながら、アメリカの外交戦略や日本外交の問題点まで掘り下げていく。「インテリジェンス作家」と銘打たれた通り、行間を読み解く興味は尽きない。〔講談社・1785円〕